

リビングロボット(伊達市) 社長・川内康裕(上)

ふくしま創生  
挑戦者の流儀  
「立体的な学習で、子どもたちの創造性を育みたい」。リビング

小さな二足歩行のロボットが手足を動かすデザインが愛らしい。2020(令和2)年度に伊達市の学校に導入されて以降、教育現場に着手した。背景



タブレットを手にロボットを操作する川内。携帯電話の開発が原点だ

## 小型ロボットで新境地

「あるくメカ」が開発した学習用ロボット「あるくメカ」だ。タブレット端末でプログラミングを組むと、歩いたり、ダンスをしたり、思いのままに操作できる。手のひらに乗るほどのサイズで、丸みのある

には、大手電機メーカーで技術者として培った経験があった。愛媛県出身で、愛媛大工学部を卒業後、1990(平成2)年にシャープに入社した。携帯電話の開発はゼロからのスタートだった。

世界初の機能の搭載に取り組み、成功を収めた。スマートフォン機能を搭載した人型のロボット型携帯端末「ロボホン」の開発が、新たな挑戦への契機となる。「ロボットは単なる道具ではない」。進化を志した。

リビングロボット(伊達市) 社長・川内康裕(中)

ふくしま創生  
挑戦者の流儀

プログラミング学習用ロボットを手がける研究拠点を設けた。製造工場を探し

## 県内移転、復興担う覚悟

ベンチャー・リビングロボットは、2018年(平成30)年に東京で設立された。翌年に本社を伊達市に移し、2020(令和2)年には、大手電機メーカー

ただ、入居している企業は災害対応ロボットなど、復興をテーマにした研究を手がけられた。「ロボットで子どもたちを笑顔にできる自信がなかった。福島を未来をつくる覚悟ができた。

将来的には利用者の感情に寄り添った「ドラえもんのようなロボット」の開発を目標に掲げる。買い替えることなく、持ち主の生涯に寄り添う存在を目指している。子どもや高齢者だけでなく、現役世代にアプローチする機能の開発にも意欲を示す。



ロボテスの事務所で作業する川内(右)

リビングロボット(伊達市) 社長・川内康裕(下)

ふくしま創生  
挑戦者の流儀

伊達市のベンチャーリビングロボット社活用が広がり、子どもたちの笑顔を生んだ。

の後に入社したロボット事業会社で、小型の二足歩行ロボットの開発、運用も担った。ロボットに向き合う日々を過ごす中で、愛着が湧いた。「ロボットは日常生活でのパートナー

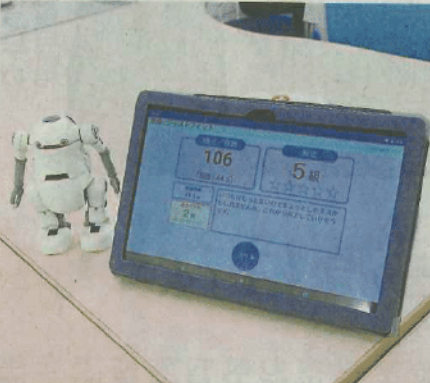
川内は小さなロボットを手に、言葉に力を込めた。「開発する私たちも成長したい」。ロボットの可能性を信じて、ひたむきに研究を続ける。(文中敬称略)

## 共生する介護ロボに力

長の内川康裕(55)は「人生をともにするロボットを作る」と決意。開発したプログラム学習用ロボット「あるくメカ」は教育現場で注いでいる。

「人生をともにするロボットを作る」と決意。開発したプログラム学習用ロボット「あるくメカ」は教育現場で注いでいる。

川内は小さなロボットを手に、言葉に力を込めた。「開発する私たちも成長したい」。ロボットの可能性を信じて、ひたむきに研究を続ける。(文中敬称略)



開発中の見守りロボットと、タブレットの脳トレの判定画面